

今はご時世的に厳しいけれど、もともと旅をすることが好きなほうだった。近ごろは、ほとんどどの国でも——たとえば小さなお土産店や、ときには屋台でさえも——カードを使っていろんなものを買うことができる。ただ、私が学生のころは、現地の空港に着くとまずその国の銀行の小さなブースで、一万円札を何枚か、現地のお金に換える作業から旅は始まっていたように思う。国によって刷られている絵はいろいろで、同じ額でもデザインがちがう紙幣が混じって使われていることもしょっちゅうあるし、算用数字が書かれている場合は問題ないけれど、ときにその国の数字で表記がされていて戸惑うこともある。また、使いこまれたにも差があった。たいていは私にとって名前さえわからない、その国でなにかしら素晴らしい功績をあげた人物の肖像や、時には私でさえ知っているその国の遺跡や有名な景勝地、さまざまにその国を象徴するものが描かれている。

私が個人的に好きなデザインの紙幣は台湾の五〇〇台湾元札で、肖像は誰かひとりの偉人ではなく、子ども野球チームのメンバーが描かれている。モデルは南王少棒隊というチームらしいけれど、特にそれを紙幣に表記しているわけではなく、表向きは一般的な少年野球チーム、としているらしい。

## 旅と紙幣

高山羽根子



絵・江口修平

い。海外の紙幣には、そういう具体的ではない人物デザインも結構あって、ラオスの紙幣にも、何人かの民族衣装を着た女性が描かれているものがあるけれども、それがなにかの偉人というわけではないらしい。

紙幣には絵やデザイン（の意味）はもちろん、その中に暗号めいたコードが刷られていることもある。ただそんなことを知らなくたって、そのお金を使うことは、当然な問題もなくできる。

ときには手にしてぎよつとするほどにくたくたにくたびれている紙幣もあり、いたいこれはどんな旅を経て私の手元に届くのだろうかと考えたりすることもある。ときにはだれか子どものお年玉に、またはどこかの理髪店で主人がお菓子の缶に入れてへそくりしていたかも、ときには無理矢理奪われ、戦いの末掴み取られ、踊り子の衣装のひもに挟まれて一緒に舞台のスポットライトを浴びたかも。

そんなふうにながら自分の旅行用の財布に入れる。帰るときまでにそのお金がどれくらい減っているか、それでどれだけのものを食べたり、観たり、買ったか、想像しながら空港を出てにぎやかな広場に出るとき、ああ、今から旅が始まるのだと実感する。

たかやま・はねこ●小説家。1975年富山市生まれ。多摩美術大学卒業。2009年「うどん キツネつきの」で第1回創元SF短編賞佳作に選出されデビュー、2016年「太陽の側の島」で第2回林芙美子文学賞受賞、2020年「首里の馬」（新潮社）で第163回芥川龍之介賞受賞。最新刊は『暗闇にレンズ』（東京創元社）。

